
IS(インフィニット・ストラatos) ~何というチート人生~

メフィスン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニット・ストラトス
IS（何というチート人生）

【NNコード】
N2188Z

【作者名】
メフィスン

【あらすじ】

俺の名前は久遠 龍二。目を覚ますとそこは見知らぬ場所だったんだ。しかもいきなり神様が現れて……俺の人生どうなるの！？この小説はオリ主が一夏ラウ・アーズのキャラとイチャイチャする、そんな話です。あと、オリ主はチートです。それは断言できます。

始まりは突然（前書き）

あの…………すいません！もう片方が全く書けていないのに新作始め
ちゃつて…………
けど、頑張つて行きますので…………よろしくお願いします！

始まりは突然

「……………、何処だ？」

田が覚めると全く知らない場所に居ました。いや、俺は「こんなとこ」ろに来た覚えは無い。そういつ考へていたら、

「おお、田が覚めたか」

「うおっ…? だ、誰だよ…」

田の前に変なじいさんが現れた。いや、何だよこれー夢か、夢なんだよなー

「違うぞ、夢ではない……儂はお主らから神と崇められとる者じや」

「はあ? か、神が何で俺の田の前に居るんだ? …… ってか心読むな

!」

「おお、すまんすまん。しかしながら、急ぎの用があるんじや」

「俺も学校があるんだよー早くしてくれー」

そう、俺は高校生なんだ。だから早くしないと学校に遅れるー

「ああ、その話なんじやが……お主、行かんでーいぞ。とこつか、行けん」

「……………はー?」

突然何だよー自称神が現れたかと思つと学校に行けないつて……………

「すまんな、儂らのミスでお主を死なせてしまったのじゅう」

「何ー? つーか、お前らの責任かあ! ! !」

「いきなり死の宣告来ました。って何で死んだんだっけ? ああ、
そういう通り魔に刺されたんだっけ.....」

「すまんっ」と言つてゐるであらつ。だから責任を取つて転生せしむ
る。ただし、元の世界は無理じゅうぞ?」

「 転生? それつて、小説の世界とかも行けるのか?」

「儂の手にかかるば何処でも行けるわい!」

いや、胸を張られても..... ってか、それなら..... 戰争とかは無し
だな。すぐ殺されちまうもんな。

「それなら問題無い! お詫びでお主の願いをいくつか聞いてやる

「それマジか! ?」

なんか話がいい方向に? まあいいか。

「それでは、戦争が起こつてゐる世界でいいのか?」

「いやいやいや! そんな事無いですよー!」

「 変わり身が早いの。それじゃあ、何処がいいのじゅう?」

「うーん..... 仮面ライダー好きだったからなあ、そこでもいいけど.....」

「.....」はあえて、

「HISの世界でお願いしますー!」

「HIS.....? はて、どんな世界じゅうたか.....」

「えつと、インフィニット・ストラトス..... だつたよつな.....」

「ああ、あれか。分かった……それでお主の願いは？」

「ふつふつふつ、これで俺はハーレムの中に……」

「とりあえず、男のまま転生がいいです」

「了解した。……つといつ事は、IISに乗る才能もいるな？」

「はい！お願いします！」

「いいんじゃ、儂の責任だからな……後は何がいいかの？」

「えつと、素手でIISと戦える身体能力は……いけますかね？」

「むむつ、何故そんな能力が……ああ、なるほどな……分かった」

俺の心を読んだが、俺も良く考えて無かつたんだが……まあ、いか。

「それで、後は何かあるかな？」

「ええつと……専用機が欲しいんですけど」

「任せい！儂の手にかかれば最強の専用機を用意してやるー！」

ん……？急に張り切つたぞ、そつこうの得意なのか？

「ああそりゃなんじやよ 儂はそういうの作るの大好きなんじや やでどうこうのがいいのじや？」

また心読んでる……

「えつとですね……平成仮面ライダーに変形できるIISがいいんですけど……」

「なぬ？……それは、何だ、あの……サプライダーもなのか？」

「目を光らせて」ひひを見ないで欲しい。

「えっと、出来たらやつして欲しいなあつて……」

「任せこー…それくらい無いとつまらんーそれで、カブトとかなのじ
やが……どうすればいいんじや?」

「どうすれば、といふと?」

「ベルトに装着されたまま、か……原作通り自律稼動させるのか
なのじやが」

「もちろん、後者でーえつと、よろしければ、キバとかもそれでい
けるでしょ?」

「むむむ、任せよー……久しぶりに楽しめやハジヤ……（ボソッ）

ん?今楽しめやつとかなんとか……

「おつと、話がずれたの……それじゃあ、お主が用意めたり……
…そうだな、IIS学園入学1週間前のあるあたりになつておる」

「あ、ありがとやつ」やれこまく

「ここんじや、氣にするな。……それとだな、お主は篠ノ之 束
と生活しどよつになつておる」

「…………は?」

「あのじやな、お主は篠ノ之 束と共に生活をしどよつ事にな
つとる。どうすれば、専用機持つとる理由にもなるじやろ?」

ああ、なるほどなあ…………だけどあの人かあ…………

「まあ、氣にするな。チート、といふんじやつたか?そんな機体を
持てるのじやからな」

「まあ、まあやうですが……」

「よし、やつとなれば出発じや。IISは後から送るからーのー」

そう神が言つと、俺の意識が遠ざかっていった。

始まりは突然（後書き）

感想、批判などいきましたら、感想にお書きください。

オリジナル主人公&・IS設定

名前：久遠 龍一（くどう りゅうじ）

年齢：15歳

身長：169cm

体重：68kg

容姿：黒髪で肩まで伸ばしている。目は両方とも黒。だが、電王を使用している場合はそのフォームに合わせた色になる。

性格：周りをよく笑わせる陽気な性格。だが、試合などには真剣に取り組む。

備考：篠ノ乃 束とは共に暮らしていたため、仲が良い。また、IS学園に来るまでは、束の研究を手伝っていたため、ISの知識は大体頭の中に入っている。

ISの設定

IS名：オールドライバー

能力：平成の仮面ライダー全てに変形をすることができる。また、タツロットや、カブトゼクターなどは、龍一の意思で呼び出せる。キバットバット三世は常に龍一の側に飛んでおり、クラス全員が存在を知っている。また、戦闘にアドバイスをしてくれる、オペレーターの役割も果たしている。

また、飛ぶ事は基本出来ない。

待機形態は、腕時計型のディケイドライバー。

オリジナル主人公& IS設定（後書き）

原作を知らないバカですが、頑張ります

誰かが俺の名前を呼んでいた気がした、つていうか絶対呼んでいたのだが、ここがどこなのか分からん。

「つかーくん やつと起きたんだね」「

名前を呼んでいる方を向くと……篠ノ乃束が立っていた。そして

息が！

「おこ東、龍一が苦しみに苦しむんだ。」

え？ て あ！ ！ いくん大丈夫かし！ ？

誰かが注意してくれたみたいなんだが……あの声どつかで聞いたよ
うな……
あ～そんな」とよつて空氣づめ～！

「りゅーくん、朝(じ)飯だからね 早く降りてこないと東さん(とうさん)が全部(まつぶつ)食べちゃうぞー」

『 そりゃ て 部屋から出でていへ束…… わん。 一応年下だしなあ、『 わん』 付けはしないとね！

「おこ龍」——聞こえてるか?」「

「ん、ああ…………つてキバットー……?」

声のした方を向くと、キバットバット三世が飛んでいた。いやいや、おかしいだろ!……つていつか……

「……何処なんだ?」

「神の説明聞いてなかつたのか?さつきの奴、篠ノ乃束の家だ。つつても、即席だけどな」

「つてか、お前は何なんだ?」——は後で届くつて……」「

やつ、神は後で届くと言つていた。だけど、キバットがいりや変身出来ぬぞ!?

「ああ、その事だが……」「

「りゅーくん早くう~!」「

「……後で聞く」

下から束さんが俺を呼んでいる。確かに腹減ったな……

「まずは腹」——しらえ、つてか?」「

「はは、わかつてんなら行こうぜ!——」

キバットを連れて、部屋を出る。下に行くつて言つても……どの階段だ?

適当に行きや分かるだろ……これでいいや。

「おお、りゅーくん流石だねえ、束さんの居場所が分かるなんて~

「いや…………適当つよよ…………」

「だな、近くの階段を適当に選んでたもんな~!」

「お前、ちゅ~!」

キバットがいらない事を言いやがつた……

「あいや、 そうなの？ 束さん残念だねえ……まあ、 いや。 早く」 飯食
べちゃおつ

「あ、 はい！」

そんでテーブル見たんだが……え、 何コレ？ テーブルに並んでた
のは、 和、 洋、 中三食がそれぞれ並んでいた。 つてか朝からヘビー
すぎる…… 唐揚げとか、 スパゲッティとか……

「早く食べてね！ 束さん」 の後用事があるから

「用事、 ですか？」

「そうだよ。 それもりゅーくんに関係してて、 大切な用事だよ？ 言
わなかつたつけ？」

何だらう？ ……俺に関する用事……？

聞いた方が早いよな……面倒くさいけど、 聞くか……お、 唐揚げ美
味しい！

「あの、 束さん？ 用事つて何ですか？」

「えつとねえ、 りゅーくんがIH使えるよーって、 世界に教えるの

……」

「…………はい？」

束さんの言つたことに、 キバットと俺が氣の抜けた返事をする。 え
？ まだ誰も知らなかつたの？ ……まあ、 いいんじやない？

「それで、 どうやって教えるんですか？」

「もつちろん、 Tシャツだよ

「……えつと、もしかして……」

当たりたくない予想が頭に浮かんでしまった……

「うん、テレビ局全部ジャックして、会見をするんだ あ、もちろん、キツくんもだよ」

「はあああああ！？」

「あつはは……つて俺も出るのかよ！？」

予想的中……上がり症の俺にそれはきついんだが……つといつか、キバット出していいのか？つと聞いてみると、

「何とかなるよ！」

何ともならねええええ！！

酷いなあ、犠牲が増えたぞ……

まあ、いいか。一人より、二人の方がいいしな……

~~~~~

今はI.S学園の入学式だ。前では校長が何か言つてるが、興味ない。え？会見はどうなつたつて？……聞かないでくれ。思いだしたくも無い……あの悪夢だけは……

そんなこんなでI.S学園に入る事となつた俺だが……居たよ、あいつが。

そう、もう一人男でI.Sを起動出来る男、織斑一夏だ。

つて言うか、真横だからね！？わからない方がおかしいよ！？あつ

ちは気付いて無さそうだし…………ああ、キバットは念のためカバンに入つてもらつた。だつて、喋られても困るし……

『おい！お前、早く出せつての！』

『おいおい、個人秘匿通信プライベートチャネルで話すことか？つーか、今入学式……分かるか？』

『…………ま、まあ分かるけどよお！』

うるさいな、キバットは。つーかダメだろ、確かに会見の時、俺と一緒に出てたけど…………ちなみにベルトだけ部分展開してるんだ。ディエンドだからデザインが…………まあ、大丈夫だろ。おつと、そんな事を考えてると話が終わつたようだ。教室に早く行きたい…………あ、行けるのか。

## 東さん登場と黒歴史とHIS学園入学（後書き）

えつと……………。うちの方が人気みたいなので、とりあえず更新。

Kの暴走／話は全く進まない（前書き）

タイトル通りです……。おーん

## △の暴走／話は全く進まない

「はあ……」

皆さんの視線が…凄い！一夏はこれに耐えてたのか…俺、無理かも…けど、せつかく転生させてもらつたんだし、頑張らねば…目の前の一夏も頑張つてる…つて、前の席一夏かよ！

「虽然入学おめでとう、私は副担任の山田麻耶です！」

…沈黙。いやー、視線が本当凄い！背中痛いよ…なんつって。先生困つてるし…いやけど、後ろからも視線凄いし…横からも…死ねるな。うん。

『また死ぬのか～？』

『ちよ、キバット！…あ、そういう…かばんから出してやろうつか？』

なんてふざけてみるか。今出したらそつちに集中するだろ。…頑張つて逃げろよ？先生が話をしているが、まあ寮がどうじつって話だろ…気にしない～！

『いいのかー？ラッキー！』

『…はい？皆の注目がお前に来るぞ？』

『そんなこと気にするかよ～ 早くしろつて～』

…アホだ、こいつ。まあ、仕方ないから出しちゃうか。ばれないようここにこいつ…

うおつと…自己紹介の時間か？一夏～呼ばれてるぞ～？そんなこと言わないけど。

「織斑君！織斑！夏君！」

「は、はい！」

「お～お～、慌てるな。つと…キバットの発射準備完了！存分に暴れろ！」

『おいキバット！いまなら出てよし…』

『よつしやあ！行くぜ～！』

「げえ、関羽！？」

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者」

あ、やべつ！キバット行っちゃダメえ！

「はつは～！外だ！久しぶりの外だ～！」

「～～はあ～？」

「何だ、こいつは？」

「あ～、千冬さんだめ～！俺のキバットがあ～！そつ思つと後は早い。急いで俺はキバットを掴み、机の中に放り込む。少し痛いかもしないけど、死ぬよりはました！」

「おい久遠、今のはなんだ？」

「あ～…俺のパートナー、みたいなのですよ…」

「千冬さんの田つき怖すぎる…つーか間違つては無い…はずだ。パートナーだしなあ。」

「そつか…以後気をつけろ」

「えっと…何にですか？」

## 「周りを見ろ」

「なるべく、カバンに入れときます...」

それでいい。次にお前の血を紹介だ。早くUNI

あつれ～？優しいな？…まあ、いいか。とりあえず自己紹介！関羽

「何か変なことを考えていないか?」

いえ、何せ、

怒ったー?理不尽すぎるだろ?まあいいや、キバットを出していいと

「えっと…俺の名前は久遠龍一です。それでこいつが相棒の…」

「ギバットギバット三回だ！ よろしくな！」

111

ちよつ！何この沈黙！？まあいいや、座ろつと……

「ふん、まあいいだろう。この前のあれでお前を知らん奴のほうが少ないだろう」

ハナシガタシ

千冬ちゃん！？思い出したくないんですけど！？それとクラスの皆も納得した表情やめて！

れる  
...

Kの暴走／話は全く進まない（後書き）

感想お待ちしてまーす……

## 一・夏・鈍・感

「なあ、お前確か……久遠龍一だっけ?」

「ああ、そうだぜ? 織斑一夏。……束さんから話は聞いている……」

そもそも休み時間に入つてボーッとしたかったのだが……一夏に話しかけられた。めんどくさいけど、ここで無視すると印象悪くなるしな……周りからだけどね! 別に一夏に好かれても困るし……

「え! ?お前つて束さんと仲良いのか! ?」

「えつと……ああ、そうだぜ? 束さんに連れられて世界を飛び回つてたんだ……」

「それは……何とも言えないな……」

おまつ、その哀れみを込めた目で見るなああ! キバットは俺の肩に乗つてるしよ! 「つづり、酷すぎる……あ、一応転生するときにはそんな記憶なかつたんだが、キバットが教えてくれた。何で知つてるのか気になつたが聞かなかつた……めんどいもん

「ええ! ?龍一君つてあの篠ノ乃博士と知り合いなの! ?」

ああ、声デケー……」つちまで聞こえてるつつの他にも色々言つてゐるし……あれ? そういや篠……いましたねえ、一夏の後ろにねえ、こいつすげーじく睨んでますよー? 恐い恐い……

「あの……一夏つて呼んでいいか?」

「おう、俺も龍一つて呼ばせてもらひつせ?」

「了解。んで、後ろ振り返つてみな? 一夏」

「ん? つて篠! ?」

「やつと詠づいたか馬鹿者ー！」

「ああ、君が篠ノ乃簞さん？ 束さんから話は聞いてるよ？」  
「何ー？ 姉さんから…………」

いや、知ってるけどね！？ 一応初対面だし…………まーたー曰ーつー  
きーがー恐いー！ 束さんの話題は止めよつ。つん、俺の命がもたな  
いや。

「ああ、俺の事は気にしないで？ 一夏に用があつたんでしょう？ 篠ノ  
乃さん」

「え？ あ、ああ…………話がある、つこてーーー」

「え、いいけどよ…………チャイム鳴るぜ？」

あ、本当だ。俺のせいいか？…………そうだな、俺のせいだ。つてか、  
これつてさあ…………原作崩壊したね、うん。

「次の休み時間にしたらどうですかい？ 篠ノ乃さん」

「え？ あ、ああ…………そうじゅーーー一夏ーーー」

「わ、分かったよ…………」

何かアドバイスをしてみる。あ、簞がこつち見たな…………一応笑つ  
ておこひ………… ただの変態に見えるだらうけどー！

「（な、何なのだあいつはーーいきなり笑いかけてきてーーーでも、  
助かったから一応礼を言つとかねばな。）久遠、ありがとう。私の  
事は簞と呼んでも良いぞ？」

あれ、意外と好感度！？ ま、まあ、あらりから詠つてきたんだし……

……

「いや、いいよ。俺は篠さんの恋が実るよう応援してるだけだよ？」  
「な、なななななっ！」

「どうしたんだ篠？顔真っ赤じゃねえか？」

あ、一応小声でだよ？一夏なら気付かないだろうが、篠が気にするだろうし。その結果がこれだよ……篠は顔真っ赤にして棒立ちだし、一夏はいつも通りの鈍感ぶりを見させてくれた。

「篠……でいいのか、チャイムがなつたぞ？早く座れよ？」  
「わ、私は恋など……え！？あ……すまんな、久遠……」  
「俺のことも龍一でいい」  
「そ、そうか。龍一……昼休み、話がある……それではな」  
「え、あ……分かった」

……えっと、わたくし何か変なことしましたつけ？つてかキバツト鞄に入れつて！

「嫌だね～！」  
「お前なあ……あの鬼に叩かれてもいいのか？」  
「う、そ、それは……」  
「だつたら早く入れ！織斑先生が来るまでになー」  
「うい～……」

よつやく入りやがった。疲れるねえ、わざわざこんな事しねえといけないのか……面倒だな。

……さて、と。授業が始まつたんだが、あの、織斑君？何を頭抱えているのかな？

「織斑君？何かわからないところがありましたか？何でも質問してくださいさいね、私は先生ですから！」

「おお、急に胸を張つて！……む、胸が揺れている……一気にしてはいけないのは知つているのだが……」

「あの、先生……」

「はい、何ですか？」

まさか。

「ほどんど、いや……全部分かりませえん……」

「やりやがつた。おいおい、織斑君よお、そりやないだらけ。つて……俺は束さん手伝つてたからなあ……」

「ええ？ぜ、全部ですか……今の所で分からないうつて人はいますか？」

……。

沈黙つてーのは嫌いだあああ！あの入学前の必読の参考書束さんに見せたら、分かりやすく説明してくれたし……ナニコレ？役得じやないかよ。流石、神！このことも想定して……

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「え、ええつと……電話帳と間違えて、捨てまし」

バシッ！

痛そうですね、ほほほほほ。この後、結局再発行して、一週間で覚えるようになったよ。ま、俺には関係無い。

## 一・夏・鈍・感（後書き）

この方方が書きやすいのは何でしょうか。感想お待ちしております！

## 「の黒倒／被害は俺だけ？」

次の休み時間、一夏はさつとと簞に連れてかれちまつたから……暇だ。誰かと話しても周りには人が居ない。遠巻きから俺を見てやがる……俺は珍獸か！？

「ちょっと、よろしくて？」

「ちょっとよろしくないです」

「んあ？ 誰だっけ？……名前は……なんだっけ？ セ……セ……そうだ！ セシリア・モルモットだ！ 何でモルモットが俺に話しかける？……あ、一夏が居ないからか。

「まあ！ 何ですの！ その態度は！ 私に話しかけられるだけでも、光榮なのですからそれ相応の態度というものがあるのではないか？」

「だつて……お前の事知らないしよ」

「なつ！ 私を知らない？ セシリア・オルコットを！ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を？」

「へえ……セシリア・オルコットって言うのか。さつきまでセシリア・モルモットだと思ってたよ」

「なつ！？ それはあなたでしょ？ なんてつたつて2人目の男子S操縦者ですからね」

これって、キレテイイノカナ？ 実験生物つて事だらうな。だけど、俺には束さん居たし……そりや、色々実験してたなあ……

「えつと……まあそだな。束さんには色々協力してたし」

「それって、篠ノ乃博士のことですわね？」

「ああ、そうだが？んで、その代表候補生さんが、何のよつだ？」  
「…本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくする」とだけでも奇跡・・・幸運なのよ？その現実をもう少し理解していただける？」

「へえ、そうなのか。ま、俺には関係ない…よな？」

また目つきが怖い。まあ、篠よりはマシだが…ん？千冬さん？あの人は神の域を超えてるだろ。  
いや、真面目に。

「関係ありますわ！なぜなら、あなたと私は同じクラスですもの…」「え、ああ…そうだったの。まったく気付かなかつた…」「まあ！あなた、自己紹介をちゃんと聞いていなかつたのですか！？」

「周りの視線のせいでそんな余裕なかつた…」

「これは、本当だ。周りが俺と一夏のことをずっと見るから、緊張しまくつてたからな。あいつもそうだろう…まあ、これで3人覚えれただな。一夏に篠に…オルコットだな。後は絡むまでわからんねえな…のほほんさんもあだ名しか分からぬからな。本名を聞かねばなん。

「そんなの理由になりませんわ！大体、あなた方I.Sについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でI.Sを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思つていましたけど、期待外れですわね」

あ、ちょっとイラついてした。まあ、こんな小物に怒つても意味無いしな、我慢。

「すまないな、よく言われるんだよ。俺って馬鹿だしな… I.S.に関しては別だろ」  
「I.S.のことわからぬことがあれば、まあ 泣いて頼まれた

「教えてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですか？」

え、無視ですか？あの、俺って東さんとこう凄い教師が居たんですけど。…まあ、こきなり抱きついてくるところ以外は完璧だしな、あの人。

「…え？ま、まあ機会があればな…あ、そういうや俺つて入試受けてないような…」

「…はい？」

「だから、入試受けてないんだよ。前日まで東さんと一緒に絶だったしふん。

そななだよ、俺の会見とこう名の黒歴史の後、日本政府から電話が来て急遽入学することになつたんだ。だからそんなの受ける暇なかつたんだぜ？それでも、神から専用機もらつたのだつてそのときだし。東さんが持つてたんだがな…そういうことにしたんだが。た

「まあ、関係ないだろ」。どうせ負けてたつて。俺のことだし…」「そ、そうですね、あなたなんかが勝てるわけありませんわ！」

うーん、勝てただろ」けど、いちいち絡まれるのはメンドイ。つっこことで、負けたつて事でいいや。

チヤームが鳴るまで、こいつは一夏を探してたな…俺の田の前で。邪魔すぎるだろ、淑女さんよお。さすがに女尊男卑のこの世でもそれやないんじやないですかい？

「の馬鹿／被害は俺だけ？」（後書き）

感想お待ちしております。

篠・ノ・之・等(前書き)

タイトルはおふざけですか……(笑)

「あの〜、篠さん? 用事つて何かな?」

「そ、そのだな…何故、私が一夏の事が好きだと思ったのだ…?」

「見たら分かるって…」

今は昼休み。さつき言われたとおり篠に連れられて屋上に来たんだが…腹減つたなあ、これだけのためにここまで連れてこられたの? 僕…辛いよ?

「…」

「話つてこれだけ? まあ、任せろ。応援はしてやる」

「へ〜? あ、ああ…すまないな」

「いいつて、束さんにも言われてるし…まあ、それは理由の一つで。大きな理由は、俺なんかより周りの皆が幸せになれるようひいて言う俺のモットーがあるからだ!」

「…は、はは…」

「わ、笑われた! ?」

やべ、声に出しちゃつた…相手も田丸くしてるし…けどなあ…転生前からの田標だからな。これ変えられないし…まあ、いいか。

「い、いや…すまんな。私のためにそこまでしてくれるとは…」

「いいつての、よし、話が済んだなら飯食いに行こいぜー」

「え? あ、ああ…」

「い、ぢつましたかね? 顔赤くして…あー手つないぢやつてるからか…けど、じうしないと早くいけないし…腹減つたあああああ…! 全力で走る…!」

「全力で走つていいくけどいい？ 答えは聞いてない！」  
「せめて聞いてくれえ！？」

Side 篠ノ乃 篠

久遠 龍一、私の手を握つて食堂に向かつている男の名前だ。この男は自分の事より他人に幸せになつてほしこと言つた。正直、私は理解が出来なかつた。

それは、自分がそういう事を考えず、ただ一夏の事を追いかけていたからだと思う。だが、こいつの一言で気づかされた。

他人の事も、しつかり見て行かなければ行かねばならないと言つことだ。

つといづより早すぎはしないか？え、まだ全力じゃない！？止めてくれえええ！！

Side 久遠 龍一

何か、篠が上の空になつて何か考えている。まあ、いいのだが……

「おー、着いたぞ？」  
「あ、ああ……」  
「は？ど、どうした？……つてなるほどね……」

篠の田線を追つていくと……一夏が楽しそうに女子と食べているよ。あいつ、本当にダメだな……

「よし、篠。俺が何とかしてやる

「べ、別に飯くらこむ……」

「いっての、任せうつてー」

そう言つと一夏達に近づいていく。もぢりと、手はつないだままだぞ？

「おこ、隣いいか？」

「え？ ああ、龍一か。いいけどよ……あ、簞もか？」

「あつたりまえだ、馬鹿。幼馴染み何だろ？話すことあるだろ？が

……

「ああ、せうだな……すまないけど、どうてくれない？」

「ええ～？ 折角織斑君の隣になれたのに～？」

「すまん！ お願ひ！」

「俺からも頼むよ、飯食つ時間無くなつてしまつからねーも……」

「……」

簞せーん？ すねないの。いやー……けど、すねてても可愛いな。取り合えず頭なでなで。

「なつ～？ 何をする～？」

「あ、すまん……可愛かつたから～」

「わ、私がかわいい……～？」

ああー、顔赤らめひやつて。いや、かうの子一やつてほんと田で見るなあああ……絶対やらねえぞ！

「頭……撫でてくれたたら代わつてもこいよ？」

「りょーかい。ほらよ……」

「あ、ありがとうーはい、どうぞー！」

「ほり、簞空いたぞ？ 俺はいいから座れって

「私が…………可愛いか…………フフフ…………」

「おーい……舞やーん？」

「…………さつーあ、ああ…………すまないな」

篠さん……俺に言われて喜ぶんかい。

「ん? 龍一、お前はどうするんだ?」

「そ、  
そ、う、だ、ぞ！お、前、ほ、じ、う、する、ん、だ！」

二の間二つ前は一夏の話に二才

「ルームまでしてもらひ」と逆に困る。……………和風定食で

レバノンのアラビア語では、この表現は「**لهم إني أنت ملائكة**」(Allah, You are the Angel)と呼ばれます。

でいいか！天堂屋みたいに具は3つだつたらいい……わけないか。  
伊達さんが作つてたおでん皿そつだつたなあ…………お、きたきた。

「ほれ、これだろ？」

「……………すまんな、ああ、ん？」

「……お前は尊二話せばいい。聞けり、おそれば俺廿

「…? 篠さん?」

私のそばにいろ

卷之三

「キバット忘れた.....」

仕方ないんだ！ 篓が一人きりがいいつて言われたし……………すぐにこ  
こに来たし……………後で何か食わせよっと……………

「ああ、あいつか？」

「そ、まあ気にすんな。お前らには関係ない」

「やうだな……」

「やうそう、んじゃ早く食うわ。それまでお前ら思い出話とかしきな？休み時間だけじゃ足りなかつただろ？」

「これでよし。俺はゆうべり飯が食える……ん、大根……いな……一人も仲良さそうに話しているし……良かつた、良かつた。これでいいんだ。俺は一生独り身だらうなあ、こんな感じじや。」

「ふう……」

「どうした龍一？何かあったのか？」

「第……ありがとよ。けど、心配すんな、俺は大丈夫だ。お前は自分の事に集中しな？」

「あ、ああ……助かる」

「ん……なんで俺の事を気にするんだる。まあ、いいが……」

「あ、食い終わつた……お前ら、教室戻るぞ？」

「え？ま、まだ私が食い終わつてないぞ！」

「そつか……んじゃ、俺は待つとくから、お前は先に帰つていいくぞ、一夏」

「おう、分かつた……遅れるなよ？」

「はは、分かつてるつて！」

「まあ、これで帰るあいつは駄目だらうな。第さんがすつしんへ怒つてゐるし。」

篠・ノ・之・等（後書き）

感想お待ちしております。

## 牌を出の致意（前書き）

タイトルは気にしないでください。

## 滲き出る殺意

「篠……今はすまなかつた  
「……別にいい。あいつはああいう奴だからな……」

凄い怒りでいらっしゃる……確かに一夏が先に戻るのは悪いよな。  
俺が原因だけど……さて、どうすれば一夏が篠を好きになるんだ  
らつか……

「龍」……おい龍ー!」

「ふえ?……ああ、食い終わつた?」

「そりだー早く戻るぞー!」

おおつと、意外と時間経つてゐる。走つて帰るか。篠が追い付けるか  
わからんが。

「篠、走るか?」

「ああ、当たり前だ!」

「つおつー待てつて!」

それより先に走つていきやがつた。ん~、足速いな。まあ、それは  
おこじこで……

「食べた後すぐに走りちゃいけませーん!」

（）

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め  
ないといけないな」

ギリギリ授業開始には間に合つた……だけ、この授業で代表を決めるひしご。まあ、俺はめんどこし……一夏がなればいいんだよ……うん。

「クラス代表者とは、対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だと考えてもうつていい。自薦他薦は問わない。誰か居ないか?」

「はい、織斑君を推薦します!」

「私もそれがいいと思います!」

「俺もーそれがいいなあー」

「お、俺?……って龍!ー!お前も俺を!」

「すまないが、お前が適任だからな……」

「他にはいないのか?いらないなら無投票当選だぞ!」

「じゃ、じゃあ、俺は龍!ーを推薦する!」

「なつー!ーまあ良いけどよ……」

おつかれ、俺を選ぶなんて……なんてことしてくれるんだ!—これじゃ、睡眠時間が削られる可能性があるだらつがあああー!…まあ、戦えるなら良いけどよ!—

「納得できませんでしたわ!—そのような選出は認められません!」

おお、モルモットが机叩いて立ち上がった。ついでに言つと、一夏も立つてゐ。…ん?俺?もちろん座つてるよ!授業中だからね!—お前ひやうこいつとはわけやんとしろよ!—

「男がクラス代表なんていい恥さらしですわ!—のセシリア・オルシットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!?」

ほほつ、言つじやないですか。お前なんかほんとうに良一さんじや

ないか？一夏が代表になるなんてな。俺？やる気無いからどうせ負けるよ。だつて…本気で勝ちに行こうとすると、ハイカブ使うもん！

「いいですか！…」

「だーめ」

「なつ！？」

「おい、龍一…」

「いいんだよ、どうせお前も限界だつたんだろ？」

「あ、ああ…」

そろそろ授業始めて欲しいという視線が…数人から来てたので早く締めてほしいのだが。まあ、俺は良いんだけどな？その…だな、先生が俺をガン見してくるんだよ。それから開放されたいんだ！何で俺は睨まれねえと何ねえんだあああ…！

「（面倒だから）オルコットさんがやればいいと思います。そもそも、彼女は学年主席だと自慢してたので、彼女が適任でしょう？」

「久遠、面倒だと思つてないだろうな？」

「あ、当たり前ですよ！俺は早く授業したいの、分かる？オルコットさー」

「決闘ですわ！」

「…あ？」

決闘って…勝つたら何もしないでいいの？ねえ、聞いてる？

「勝った方が、クラス代表ですわ！」

「ええ…？」

「なつ！…受けるのでですかどうなのですか…？」

「おお、一夏君と氣があつたではないか。よし、握手しようと。うんう

ん、友情つていいなあ。

「…しゃーない。それが手つ取り早いな」

「おう、いいぜ。俺も受けちゃるよ。四の五の言つみりわかりやすい」

「言つておきますけど、わざと負けるよつなことをしたらわたくしの小間使い…いえ、奴隸にしますわよ~」

ど、奴隸？…あれですか、頭に性が付くやつですか。

「…まあ、俺は勝ちたいんでな…とりあえず戦えりやあい…」「真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない…ハンデはどれくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？あなたもハンデが欲しいなら今のうちはすわよ~」

イラッ…いや、冗談抜きでのドヤ顔は許せん。今ここで力の差を見せ付けておぐべきか…？

「いや、俺がどれくらいハンデを付けたらいいのかなーって」

「…え？」

「当たり前だろ？お前らが驚いてんのは、HSが使える女と使えない男の力の差についてだろ？が。俺らは少なくともお前らと同位置なの…分かるか？」

「…」

…なんで黙るかな？殺氣とか出てたかな？…千冬さんは笑わないの！その笑い方は人を怖がらせる…

「ま、まだな。俺たちだつてHS使えるんだが…相手は代表候補

生だからな。一夏はどうだか知らんが唯一試験で教官倒したらいい  
しな…俺は殺つてないけど

はあ、疲れたーもつ当分喋りたくない！

「さて、話はまとまつたな。それでは勝負は1週間後の月曜日。放課後、第3アリーナで行う。織斑とオルコット、それと久遠はそれ準備しておくよ。それでは授業を始めや」

あつれー？俺がついでみたいな感じになつてませんかね？……まあ、いい。今は授業に……集……ちゅ……ＺＺＺ……

## 想を出の致意（後書き）

感想お待ちしております。

## 寮と地獄と東さんへの制裁

「……頭、痛い」

「それはお前が悪いではないか。あの人前で堂々と寝るとは……」

「ああ、そういうて頭撫でてくれるの嬉しいよ、篠さん？」

「あのあと眠すぎて寝ようと思つたんだが……いやあ、鬼神おにじんが恐ろしくて、何度も殴られたよ。しかも常に同じ場所を……放課後の今はもう大丈夫だがなあ。」

「つていうか篠さん？部活はどうしたんだい？それと、撫でてくれるのは嬉しいんだけど、何で撫でてくれるのかな？」

「……」「……」「……」「……」

「や、そうだったな！ではな！」

「くつそはええ……ん？一夏君？……俺の前の席で死んでますよ？頭から煙出してね。一気に頭に詰め込み過ぎたんだろ。そして周り！やりたそうにこっちを見るな！……俺の頭は俺が認めたやつしか撫でさせんからなあ！？」

「ああ、織斑君、久遠君。まだ教室にいたんですね。よかつたです」

「はい、何ですか？」

「……」

「山田先生が教室に入つてきた。あれ……放課後、だよな？そして、一夏、せめて返事はしようか。」

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

「はい？」

「おお、やっと起きたか。いや、起きてたのかもな……今となつちやどうでもいいが。

「俺の部屋つて決まって無いんじや？自宅通学だと聞いたんだけど……」

「俺も～」

「そりなんですけど、事情が事情がなので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです」

「事情？……ああ、俺たちつて男でエサ使えるから、他国に捕られぬいようにここで保護といつちの監視をするためか。

「なるほど……で、俺は一夏と同じ部屋ですか？」

「そ、そりですよー女と同じ部屋とか安心して眠れませんよ？」

「そ、そのですね……一人が相部屋で、もう一人が一人部屋何ですよ……」

「…………一人部屋がいいに決まってるではないか。はつはつはん？…………

「俺が一人部屋ですか？」

「ええっと……織斑君が、一人部屋なんですよ」

「神は俺を見捨てたああああ！」

「よし！」

「何でだよー？俺が一人部屋じゃないのー……一夏と等の相部屋じやないのか！？」

「な、なななな……」

「…………」

「ぐ、久遠君？これが部屋の番号が書かれている紙と、部屋の鍵です」

「ま、俺もお前とが良かつたんだが……これは仕方ないな」

「ヤ顔すんな！一夏の野郎……来週潰す！絶対に潰す！！」

「……あ、そう言えば。一夏、お前荷物は？」

「そうそう。先生、荷物を家に取りに帰らないといけないんですね」

「……千冬姉？そのカバンは？」

「織斑先生だ。私が手配してやつた。久遠は持つてきているだろ？」

？

「え？ああ、そうですね」

「今日、日本に帰つて來たつて……酷いな。前日からホテルでゆつたりさせてくれるかと思いつか、飛行機の中つて……嫌だわ。

「あ、ありがとうございます」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器があればいいだろ？」

「で、では一時間を見て部屋に行つてくださいね」

このあと夕食は何時からだとか、部屋のシャワールームしか使ってはいけないとか……色々注意を受け、今……寮に向かっている。俺に言わせちゃこんなの……地獄への道だろ。

「えつと……あ、俺ここだわ。後で飯食いに行こうぜ、龍一」

「お前は気楽で良いよなあ……一人部屋なんだし。俺は見知らぬ人と相部屋になる可能性あるんだぜ？……まあ、夕食は一緒に食うけどな。じゃあ、後で」

はあ…………！」か。入りたくなえ…………とつあえずノックだな。

「ノックしてもしも～し」

「…………」

よし、反応…………ええ！？ああ、飯食いに行つてゐるのか。そ�だ、  
そなんだ。そつ言つてはじめてくれ…………

「ん、意外と綺麗だな…………」

「誰かいるのか？」

はい、死亡フラグ来ましたな。俺、このフラグ壊せたら、怖いもの  
無くなると想うんだ…………

「ああ、同室になつた者か。これから一年、よろしく頼むぞ」

「…………」

声を出したら殺される…………一秒钟でもいいから  
長く…………

「こんな格好ですまないな。シャワーを使つていてな。私は篠ノ乃

「は、はるー？」

…………ここで何か言えた俺つて凄いと思うんだ。俺が目にした  
のはシャワーを使用していた篠さんだ。白いバスタオルに包まれた  
身体…………はい、堪能しました。もう満足です。

「う…………うめう…………じじ？」

「あ、ああ」

「…………」

その荒てている表情もまた可愛いな…………つていつにいじりとじやな  
くー。

「見るなつ！」

「われなぐでせそ」、すなは

ベッドに飛び込み、布団で身体を覆う。これで大丈夫だろ。

「な、なぜ、お前が、ここにいる……？」

え、とて、うれ、その前は着替えまし、さが、せやんと話をし

わ、分かつた！せ、絶対に……み、見るんぢやないぞ！」

あればフリか？見てくれってフリなのか？そうだとしても、わざわざ死に行くなんてバカなことはしないさ。…………このまま待機だな。

「いいぞ。分かつた。」

うんうん、剣道着も美しい

「そ、それでだ！何故、お前がここにいる？」

「アーティストの魔術師」

本居宣長

昨日まではね、備もアハーハ備りでそこから通学する計画だったのよ。だけどな、今日になつて急にですね……決まりますよ。

「そ、 そうなのかな……」

う、うん！俺は正しい！俺の計畫はいつも物だった！束さんは残念がつてたが……ん？

「ど、どりしたのだ？」

「いや、心当たりが……」

「それは誰なのだ？」

「お前の姉さん……」

多分だが、そうだろう。あの人はそれをやりそつだからな……。うの設計図とか渡して。

「…………それは、」

「…………ちょっと待つてな。今電話する」

「わ、分かった……」

束さん…………今度会つたら一発殴らねばな。

「…………もしもし？」

『やつほー みんなのアイドル束さんだよ…………って切らないで  
えー』

「はあ…………まだ言つてるんですけど、それ」

『あはは、そんなんだよ？りゅーくん』

…………はあ、この人と話すと疲れる。

「束さん、話があるんだけど…………」

『ん？何かな？この天才の束さんに何でも言ひこいりん』

『…………俺を相部屋にしたのつて、束さん？』

『…………あ、あはは、な、なんのことかな？べ、別に篠ちゃん  
と同じ部屋になんて……』

「誰が篠と一緒って言いましたかね？」

は、やっぱりか。

『……………ごめんね、りゅーくん。篠ちゃんを任かせられたの、りゅーくんしかいないから…』

『……………一夏じゅ、黙目なんですか？』

『………いや、いっくんはまだ専用機持っていないから一夏しかいないんだよ』

……………ですか。もうこ…せ……………でもなれ……………

「それだけですんで。じゅ」

『あ、うん 何時でも電話してきてね』

——ブツシ。

「……………だと…」

「……………ウチの姉がすまん」

束さん……………絶対殴る！

「………いや、俺じゅ……………俺なんかで良かつたか？」

「……………まあ、一夏の方が良かつたが…」

それ目の前で言われるとちよつとキツになーまあ、俺じゅ……………恋  
人なんか……

## 寮と地獄と束さんへの制裁（後書き）

相変わらず、短いですが……

感想お待ちしています。

— 夏の脳みそブレイカー（前書き）

…… タイトルとの違いが……！

## 「夏の脳みそフレイカー」

「だるい、眠い、腹減った！」

「おーおー、まだ朝だぜ？」

「自業自得だ」

朝だよ…………眠くて辛い。いや、異性と同じ部屋で寝るとか、俺が耐えられんわ。…………あ、キバット…………め、ここや。じりせ水とか勝手に飲んでるだろ。

「はふわ…………しゃーねーやー、もひ叩かれてもいつかー」

「諦めるのかよ…………」

「私は知らんぞ？」

それよりもだな、籌も…………君は何で普通に寝れてるのかな！？

「そういうや龍一、お前つて専用機持つてるのか？」

「…………いや、持つてないぞ？」

「何？…………ああ、そうだったな…………」

何で俺が持つてないよつて見せかけているかと言つと…………相手に情報を渡したくないからだ。籌もそれには賛成してくれた…………

つてのが一つで、もうひとつは…………そのままもう一機専用機貰えるんじやね？つて思つたから。束さんと籌と…………本当に少しきか知らないからな。束さんが千冬さんに言つてなかつたらの話だが。

「といつか、早く飯食おうぜ。回りの視線が…………」

「そ、そうだな…………俺たち、すうい見られてるよな…………」

「…………私には妬みの視線が多いのだが

この学園にいる男生徒両方と親しくしてゐるんだからな。そりや、嫉妬するわ。

「ふう……なあ一夏、E.Sの勉強しないか?俺と一人で」「それはありがたいな!……といひで、どこでするんだ?」「俺の部屋。すなわち、篠にも後から参加してもうつ、だよな?」「ああ、私が希望したのだ……その、だな、お前に勝つてほしいからな!」

そこは素直に一緒にいたいって言えばいいのに……篠のそういうところが好きなんだが……

「え、遠慮する!」「…………お前なあ、どうせわからないとか言つんだら?」「な、何で分かつたんだ!?」「そんな事だらうと思つた……」「馬に蹴られて死ね!」

一夏、お前キバットにライフHナジー吸わすぞ?

「んじや……放課後、俺の部屋な。」「分かつた。んじや、教室行くか」「俺は後で行くから、お前ら一人で行きな?」「おう、じゃあ行こうぜ、篠!」「あ、ああ!……す、すまんな……」

仲良さそつなのこなあ、いひ見てるど。だけど、一夏が鈍感だからなあ。

／＼＼

「——それでだな、『』は『』になつて……」

「ああ、なるほどー。」

「ふむ、やつこ『』となのかな……」

放課後、俺たちは俺と篠の部屋で勉強会を開いていた。……だが、途中参加の篠も知らない事があるらしい、講師は俺だけだ。……めんどうくさい。あの人呼ぼう。

「ちよつと待つて、特別講師を呼ぶわ

「誰なんだ？それ……つてテレビ？」

「違う、これはテレビ型の通信機だ……おー……龍一、まさか、……『』のまさか……束さん、見えてる聞こえてるー？」

『』おー、りゅーくん　おつけだよー。あ、篠りゅんといつくんも！何してるんだい？』

……束さんだ。開発者に聞くのが早いだら、つてわけである頼んだ、束さん！

『』まつかせなさいー。この天才束さんがわかりやすく説明してあげるよー。』

「…………相変わらずだな、束さんは」

「…………姉さん……」

さてと、あいつらが教えてもらつていてる間に、メダルでも拭くか。一夏とモルモットをフルボッコするのはオーナーじゃないよ？だけどね、綺麗じやん　だからいつも綺麗にしてるんだ。

「お前、りゅーかり教えてもらひよ？この人ならなんでも答えられる。」

絶対にな

『任せてー

「あ、ああ……龍一？ それなんだ？」

「ん？ 来週あいつを潰すために使うエリ関係の道具」

そうだよ…………結局もう一機貰えなかつたよ…………とこいつとでわ、  
手加減しないでいいならプトティラ無双でいいや…………つと言つ  
わけで、プテラのメダルを拭いています。おおー、きれいー！

—夏の脳みそブレイカー（後書き）

感想お待ちしています。

## 龍一の暴走は止まらない

「…金髪殺す…」

「…オルコット、俺は知らないからな」

「二人まとめてかかってきなさい…」

クラス代表を決めるための試合が始まろうとしてるんだが…何でこうなった。…さつき何があつたんだ…

（…）

「…で、結局なんだつたんだ？」

「何が？」

「あの勉強だ！IS使って練習してないじゃないか！」

ピットの中でクラス代表戦が始まることを待っていたのだが…一夏君が不満を漏らしてきてる。だってなあ、お前の専用機がまだ来ていないからな、練習しようがないんだよ。

「仕方ないだろ、お前のISが来ていのいのだからな」

「現在進行形だねー、束さんは何してるのかなー？」

「…練習機あつただろがあああ…」

一夏君が怒りました。まあ、すぐ篠さんに殴られるというわけなんだが…まあ、俺は止めるよ？篠が嫌われちゃうからね？

「な、何をするー？」

「篠、お前つて好かれたいか嫌われたいのか良くなからない」とするよな？ここは我慢しろ…嫌われるぞ？

「うつ：仕方ないな：」

「誰に嫌われるんだ？って痛つ！！」

…鈍感すぎるだろう。こいつは俺が殴る…全力でな。篠さんがそれ  
をしたら駄目だろう。嫌われるのは俺だけで良いんだ。

「んで……あの、金髪野郎は何してるのかねい……」

「あれ、殴ったよな!? お前殴ったよな!?」

卷之三

金髪野郎がずっと上空に居るんだが…暇じゃないのかな？それとも、逃げたと勘違いされたくないからずつといるのかな？それと…なんで俺が先に行かせてくれないのかな？何、俺…あいつのEIS潰すと思われてんの？酷いわ…

「お、織斑君織斑君！」

山田先生  
落着して下さ  
い  
はし  
深呼吸

卷之三

お前…………後ろに鬼神がいるのによくやるなあ

「…………ふはあつーま、まだですかあ？」

以上の人は意を抱え 黒鹿若

何でだろう、一夏が叩かれた時にターミネーターのBGMが  
流れた……あ、千冬さんだからか。

「お前もか？」

「い、いえ！…………それで、山田先生。一夏に用があるんですか？」

「あつれええ！？俺無視なの！？ねえ！？」

「あ、そなんです！織斑君の専用ISが届きました！？」

やつとか…………たて、モルモットを倒してこいよ？

「これがお前のISみたいだぜ？一夏」

「え？ああ、これが……」

「はい！織斑君の専用IS『白札』です！」

これつて…………たしか東さんの研究所の端にあつたような……  
埃が被つてた奴か。

「すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとファイットイン

は実戦でやれ」

「あれ…………？」

さて、篝さんは…………いない？どこに行つたんだろうか？

「背中を預けるよう！」…………ああ、そうだ。座る感じでいい。後は  
システムが最適化する。」「…………

あれー？篝さんは…………探しに行つつかな……

「織斑先生」

「どうした久遠？」

「俺の負けでいいんで、観客席に行つていいですか？」

「駄目だ。お前を推薦した奴の事を考えろ」「…

「…………一夏なんですか？」

「…………そうだったな…………」

よし、勝った。さてと、行こうか』『待ちなさい！逃げるのですか  
『…………何で見えているんだ。

「だつてさ…………俺とやつても意味ないって…………弱いもん」

『だからつて逃げるのですか！極東の猿はそれほどバカですのね！  
良く分かりましたわ！』

「…………あ？」

はい、あいつ殺す。絶対に殺す。

「織斑先生、バトルロイヤル形式にしてほしいです…………そうすれば一回で済みますよね？」

「…………そうだな。あいつはお前に任せぬ」

よし、これで…………良くねえええ！！筹を探しに行けないじやん！  
…………まあ、いい。金髪を叩きのめせばいいんだからな。

「一夏、俺も出る

「え？…………お前、殺るのか？」

「当たり前だ。ただの金髪にあんな事言われて許せるかよ…………」

「…………ほどほどにな

さてと、予定が狂つたけど…………金髪の息の根を止めにいくか。

『おい龍二ーーキバで行くのか？』

「んー、初めはそれでいい。んじや、殺りますか」

『おう！ガブツ！』

「…………変身、でいいのか？展開だよな…………」

俺はまずISを展開させ、キバットに俺の首筋を噛ませる。そしてキバットが腰に着けてあるベルトに装着されると、俺は仮面ライダー・キバになるんだが……これは嫌だな。どういう状況かと言つと、俺のIS、『オールドライバー』はそもそもが装甲が分厚い。その上にキバの鎧が装着されるから……凄い強そうなんだけど、遅そうに見えるんだ。実際速いが。

「さてと、行きますか……」

『キバつて行くぜーー!』

「ああ、龍一ー!」

一夏くんには悪いけど……君の出番無いかもね。

（）（）

あれ、結局俺のせいでのつなったのかーーまあいい、全力だーー

龍一の暴走は止まらない（後書き）

次回、戦闘開始！

感想お待ちしています。

## 織斑一夏の暴走

「さつさと終わらせたいんだ、抵抗するなよ?」

「あら、それはハンデですかしら?」

「あのー……俺は……」

「つーか、お前がハンデほしいだろ?本当に手加減しないぞ?」

「もうこいや…………成り行き上こうつなつたけど、ビッちも潰せるならいいか。結局こうなる運命だったのか……」

「私は代表候補生なのですよ?ハンデなんかいらないですわ!」

『龍一、あいつは射撃する気満々だぞ!』

「だとわ、一夏…行くぜ?」

「了解!」

そういうと俺と一夏は左右に分かれる。そして金髪は俺達がいた場所に《スター・ライトmk?》の照準を合わせてたらしく、そのまま一発撃つと、一夏に掠つたみたいだ。ま、俺には関係ないわな。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で!」

「黙れ……そんなこともできないのか?」

「なつ……!」

金髪の田の前に移動して、とりあえず邪魔な《スター・ライトmk?》を蹴り飛ばしておく。こうすりや相手はあのファンネルもビキしか使えなくなる…はずだ。

「さあて、ここからが本番だな……」

「な、なめた事をしてくれますわね！」

「そりや、早く終わらせたいから…行くぜ？キバット！」

『おう！ガルルセイバー！』

ガルルフォームになつた俺は、いきなり形が変わつたことに動搖している金髪をガルルセイバーで斬る。慌てて避けようとしたが間に合わなかつたようで、直撃つと…あれ、一夏は？

「どうせ俺なんか…ええい、ままで…」

「じゃーか…つと…」

「ぐつ…」

近接ブレード構えて突つ込んできました。ガルルセイバーで受け止めて、押し返すけどな。弱い弱い…その程度かよ？

「くつ…行きなさい！『ブルー・ティアーズ』！」

「ようやくきたか…キバット、動きを読んでくれ

『任せろ…』

ようやく自立稼動の『ブルー・ティアーズ』を出してきやがつた。遅いんだよ…全てを潰してやる…

「つたく…行くぜ？早く終わらせたいんだ…」

『そこだ、龍一…』

「おう…」

『ブルー・ティアーズ』は4機あるんだが、そのうち2機を斬り落とす。これぐらいのスピードとパターン…じゃすぐ読めるつての…あいつ弱いな。代表候補生つて言つからどんなもんだと楽しみにしてたが…興醒めだ、さつさと終わらせよつと。

「速い！？ぐつ…」

「チェックメイト」

「かかりましたわ！『ブルー・ティアーズ』は6機ありますよー…  
「えー、何だつてー」

…ちょっと棒読みだつたかな？まあ、いいや…来い、タツロット…！

「龍ー！」

「もう終わりでしようか？」

『テンショソフオルティッシュモー！…』

「つたく…遅いつての、タツロットー…」

『すいません~』

ミサイルに衝突する前にタツロットを呼び出してエンペラーフォームに変身し、ザンバットソードでミサイルを通り際に斬る。こうすると、爆発したように見えるんだよな。まあ、俺には関係ないが。

「なつ…また形が変わった！？」

「これが本来の形だ…終わらせるぜ？」

『ウェイクアップ・フィーバー！…』

相手の懷に飛び込み、ザンバットソードで斬り、上空へ飛ばす。金髪が体勢を整える前に、蹴りの体勢に入り、そのまま相手に蹴りをかます。

「おひあー！」

『いい感じだ、龍ー！』

「つーまだ行けますわー！」

「やうかい…………だが、終わりだ」

俺は金髪の真横まで飛んでこき、ザンバットソードを相手の首元につきつける。

「チョックメイト……」

「ま、負けですわ…………」

「やう、か…………よし、ありがとな、戦ってくれて…………」

俺は礼儀正しきの……ちゃんと挨拶くらじ出来るわ…………しつかり抱き抱えて…………ってあれ…………いつの間にか抱き抱えている…………

「つ…………男の方でも、こりこり方がこりつしゃるのですね…………」

「ん? どうした?」

「い、いえつ…………ありがとうござります…………また、先日の件は申し訳ありませんでした」

ん、いい子! 俺はこりういう子好きだよ! 割と本氣で。一夏が鈍感だからな…………筈は残念だが。

「一夏! つておわつ! !

「お前らのお陰でファースト・シフト<sup>ファースト・シフト</sup>トイティングが終わったよ…………一次移行もな

…………

あれ、怒つてらつしやる? ま、待てよ! 今は金髪を俺は抱き抱えているの! わかれよ! そりや空氣だつたのは分かるけどよ! 一

「つたぐ…………オートバジン! オルゴットを頼む」

「あ、あの…………よりしければ、セシリ亞と呼んでくださいまし……」

「おひ、じゅあセシリ亞! また後でな!」

「は、はい！？」

オートバジン（こいつも神が作ってくれたらしい）にセシリ亞を任せ、一夏の方を向く。

「すまないな、お前を無視して。だけど、これで本気で戦えるだろ？」

おおきな大きな鳥の鳴き声

力任せ、か。こんなもん避ける必要もないな。ザンバットソードで

「ぐあつー！」

「たゞ……その程度か？たゞ、  
流石千冬さんか使つてた劍だな

龍一！

「うまい句だな、筆？」

朗報だ。俺が探そうとしてた篠さんが俺に通信で話しかけてきた。  
探す暇が省けたっていうか…………

『その、だな……お前は一夏に勝てるのか?』

「当たり前だろ……俺は絶対に勝つ。俺のために、そして、お前のためにもな」

「了解」——日本文化研究の歴史

「話は終わつたか?

「アベニューアート」

一夏と距離を取り、お互いに瞬時加速をして近づき、すれ違ひ様に

一閃する。だがな、俺の方が一步上手だ。

『試合終了。勝者——久遠 龍一』

「当然の結果だ」

「くそつ！」

すれ違ひ様、俺はあいつの剣にセルメダル数枚を叩きつけ軌道をずらしたんだ。するい？ そんなこと知らない！！

「さつてと……帰つて寝るか

織斑一夏の暴走（後書き）

相変わらず戦闘描写.....orz

## Rはクラス代表／弄られる一夏

「——では、一年一組代表は久遠龍一くんに決定です！」

「… そうだった！」

「忘れてたのか…」

セシリアとの試合の翌日のSHRで俺がクラス代表だと云ふことを聞くまでその事はすっかり忘れていた。いや、忘れたかったのかもな。これってあの…あれだ…めんどくさいなあ。

「まあ、仕方ないか…」

「そういう事だ、クラス代表といつ名に恥じないよう努力しろ」「はい…」

ちふ…織村先生の目つきが恐ろしすぎるので、仕方なく承諾した。まあ、勝つたのは俺だからな…仕方ないっちゃ仕方ないが…

／＼＼

「… で、何でこうなったの?」

「確かに…」

「龍一さん…どうか私を鍛えてください!」

その日の昼休み、俺は一夏と並んでセシリアから逃げていた。なんだか俺が強いのは鍛えてるからと勘違いしてるが…残念だな、これは神から貰った力ですから。という訳で一夏を連れて逃げている。一夏も篠から逃げていたので、一緒に行くことにした…あいつの気持ちわかつてやれよな?

「いい加減諦めなよ…」

「本當だ…龍一に鍛えてもらひのは俺だのにな…」

「ああ…ん? そうだつけ?」

「そ、 そうだつて! お前が言つたんだろ! …」

…覚えてねえ。まあ、力任せに振り回してたら《雪片式型》の無駄遣い、宝の持ち腐れだからな。俺が鍛えてやろ! クラス代表になつてしまつた鬱憤を晴らすとき…

「いいぞ? ただし、少しだけだけどな?」

「おお! ありがとうな!」

「私もお願ひします!」

（）

「これよりEISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルゴット、久遠。試しに飛んで見せる」

今は一夏との特訓を初めて数日経つた日のグラウンドでの授業中。織斑先生の命令に従い、俺とセシリ亞はEISを展開する。一夏は…相変わらず展開が遅いな。

「どうした織斑、早くしろ。熟練したEIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ」

…じゃあ、俺つて熟練してるのでか。初めて知った…あんまり展開してないのにな…めんどくさいから神様のおかげってことで…お、ようやく展開できたみたいだな。

「よし、飛び『タカ！クジャク！』ンデル！タ～ジャ～ドル』

…

「あ、ベ

「久遠…今度は何だ？」

ギリギリまで変身してなかつたから織斑先生の話と被つてしまつた…恐ろしや…その分山田先生つて凄いよな。最後までチヨコたつぶ…じやなくて…

「IRSの仕様です…これはビリijoもあつません」

「そうか…他にもあるんだりつ…」

「ええ…まあ。飛んでいいですか？」

「ああ、飛べ」

そう言わると先に飛んでいたセシリアと一夏のところへ向かう。それにしても速いな…一瞬で追いついたぜ…恐ろしこな、オーブズも。だからこそ負担があるんだりつな。

「は、速いな…」  
「そうですね…」  
「確かにな…俺もびつくりだよ？」  
「…何でお前は知らないんだよ…」  
「そうですね！自分のIRSの性能べりに把握しているのが常識ですわよ…」

…怒られちつた。ベ、別に怒られてもどつも困わないんだからね…

「…流石に飛び方は安定してるな。俺が教えただけはある」  
「ああ…あの鬼のような特訓のおかげでな…」

「な、何があつたんですの！？」

「聞いたやつへ、一夏が凄い言いたくなさそうな顔してるから言わないけど…まあ、簡単に言うと下から俺が攻撃してそれから逃げるよう飛ぶという特訓だ。それをセシリアに話したら、笑顔が引きつったんだが…何でだろうな？普通だと思つんだが。

「織斑、オルコット、久遠、急降下と完全停止をやつてみせろ。目標は10センチ。久遠は5センチだ」

「ひでえ…まあ、レディーファーストだ。セシリア、先に行きな？」「あ、ありがとうございます…それではお先に！」

流石代表候補生だな…目視では良く分からなかつたが、たぶんぴつたし目標どおりだらうな。さてと、次は俺だ。

「よし一夏、先に見本を見せてやる。後でちゃんとやれなかつたら説教！」

「え！？ちょっと待てって…」

『スキャニングチャージ…』

無視つと。何でスキャニングチャージにしたかつて？…格好いいからだよ。コンドルレッグを展開させ、そのまま地上に降下する。地上にぶつかる寸前に空中で宙返りをして、コンドルレッグを元に戻し地上に降り立つ。

「…つと、これでいいですか？」

「言つことはないだけだ。あんな危険な」とはお前しかできないだろ？他の者は真似するな」

うーん、褒めることできないのかな？まあ、いいけど。つてか、疲

れるから変身解除したら……駄目ですよー。

——「オオオオンーー！」

「馬鹿ですか？俺の完璧な着陸を見てもこいつなるんですか？そうですか、馬鹿なんですね……なるほど。クレーターを作れる馬鹿なんですね。分かります。

「大丈夫か、一夏！」

「ああ、なんとかな」

「おお、馬鹿が喋つたぞ、セシリ亞？」

「そうですわね、驚きですわ……クレーターを作るほどのお方が喋れるとは」

「お前、うあーーー！」

……セシリ亞が乗つてきたことにも驚いたし、一夏の怒り具合にも驚いている。まあ、面白いけど。やっぱやめられないわ、一夏いじり。

「やつだぞ、龍！」オルコット

「纂……！」

「こいつは大馬鹿者だ」

「お前もかあーーー！」

纂さんも恐ろしい……上げて落とすところ……高度なテクニックを持つてゐるとは。

「お前ら、そこまでにしておけ。織斑が大馬鹿者だとこいつとは前から知つている」

「千冬姉まで……」

「織斑先生だ」

「痛え！」

…お嬢さん、

Rはクラス代表／弄られる一夏（後書き）

今日中にもう一つ一個出せるかもしません…

## 再会とパーティと寝不足

「それでは、武装を展開しろ。織斑、オルコット、久遠」

「は、はあ……」

「はい」

「あ、はい……」

正直今の俺つてタジヤスピナーだけなんだよなー、そう思いながら展開する俺。胸のオーランクサークルが光り、左腕にタジヤスピナーが装着される。

横を見るとセシリアも武装を展開し終わってるみたいだ。

「織斑、遅いぞ。0・5秒で出せるようになれ。オルコット、さすが代表候補生だな。ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃心を展開させて誰を撃つつもりだ。正面に展開出来るようにしろ」「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な——」

「直せ、いいな」

「……はい……」

セシリアが口で負けるとは……さすが織斑先生、格が違うぜ！

「久遠、お前は……本当にそれだけか？」

「この状態なら、これだけです」

「そうか……オルコット、近接用の武装を展開しろ」

あつれー？俺に関する感想は？酷くない？俺つてそんなに普通なのあ、普通でいいのか。まあ、異常なんだけどな……いい意味でー！

このあとセシリアが近接用の武装を展開するのに時間がかかって、初心者向けの展開法を使って……自分は近接の間合いに入らさせん！って言つてたが、俺が入つてたことを織斑先生が言つて、セシリアに個人間<sup>プライベート・チャネル</sup>秘匿通信で怒られた俺であった。

／＼＼

今日は俺のクラス代表就任記念パーティがあるらしい、それが始まるまで俺は散歩をしていた。今日は一夏との訓練はセシリアに任せた。たまには休憩したいよ……

「本校舎一階総合事務受付……つて、どこあるのよ」

……お？この声は確か……あいつか。まあ、すぐには話し掛けないでおいた。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」「おやおや、可愛い猫が迷っているみたいだな。じつした？」「えつ！？もしかして……龍！」  
「うお、いきなり抱きつくなんだよ……鈴」

そう、迷っていた奴は、鈴。鳳鈴<sup>ファン・コンイ</sup>音である。俺とここのほと色々々と関係があるんだが……まあ、これは今度話すとじょう。ちなみにこいつは俺のことが好きらしい。

「だつて、寂しかったし……」「俺もだぜ、鈴。つとこいつか、一夏に会うか？」「あいつなんか良いわ！龍がいれば……」「はいはい。んで、受付に用があるんだろ？」「あ、そなう…連れてつて？」「あ、そなう…連れてつて？」

相変わらず図々しい奴。だが、そういうところもいいな。つてな訳で、俺と鈴は何故か手を繋ぎながら受付へと向かった。

「そういうや、お前つて何でまたこんな時期に来たんだ?」

「それは……私がつい最近までここに来るのを断つてたからよ

「何でまた?」

「龍がないから……」

「そうですかい……あ、了解。よくわかった。どうせこの前の会見で分かったんだろ?俺が行くって。それで行きたくなつて政府に話をしたけど、入学式に間に合わなかつたんだろ?」

「さすが、龍!全部正解よ!」

「誉められたくねー…………だけど、女にそういうわれると嬉しいな。こんな可愛い女だとさう。」

「あ、ここだ。玄関入つてすぐのところな

「ん、ありがと……ねえ、龍つて何組?」

「一組。一夏と一緒にだ」

「あいつと一緒になのね……」

そう楽しげに話しあえた俺はゆつくじとパーティ会場である寮の食堂へ向かっていった。

／＼＼

「どうわけでつー久遠くんのクラス代表決定おめでとう!」

「おめでとう!」

「これまた豪勢な。よくもまあ、こんなパーティ開くよな、女

子の行動力がよくわからん。

「いやー、」これでクラス対抗戦も熱くなるねえ」

「うんうん！」

「ラッキーだつたよね、同じクラスになれて」

「そうだね！」

…………頷いた奴。お前ら俺のクラスじゃねえよな！？何でいるんだよーーー

「人気者だな、久遠」

「ありや？ 篠、一夏といればいいのに…………何でこっちに来た？」

「きつ、来てはいけないのか！？」

「いや、いいけど。お前の好きな人が一人寂しそうにしているからさ

…………「や、そうだな…………」

篠さんが近寄つて来たのでさりげなく腰に手を回し、しゃがみに寄せる。驚いているが、反抗はしてこない。何でだ？

「…………私はどうしたらよいのかわからん…………」

「おーい、篠ー？」

「な、何だ！？」

「うおつ…………」

「あ、すまん…………」

「いや、いいけど…………お前つて本当に不幸だな。あんな奴を好きになつてしまつて。まあ、がんばれよ！俺は応援してるぞ？」「や、そつか…………助かる…………」

そういうとそそくさと離れていく篠。顔を赤くしてゐるのも可愛いな

あ……

「セシリア、どうした？」

「あ、龍一さん。いえ……一夏さんがあまりにも飲み込みが早いので、驚いていただけです」

「ああ、今日の訓練か……」

つたぐ、あいつは元々は強いんだからな……セシリアが驚く訳だ。

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏君と久遠龍一君に特別インタビューをしに来ましたー！」

お、インタビューか。めんぢくせ、一夏だけで良くないか？

「あ、私は一年の薙薫子。（めなみがおるこ）よろしくね。新聞部部長やつてまーす。はい」（れ名刺）

「あつがとつゝぞこます」

「画数多いな。俺がこの名前だつたら挫折してるわ。

「ではではばばり、久遠君！クラス代表になつた感想をどうぞ！」「最初に言つておく！俺はかくなつり、強い！」

「おおつ、いーねー！」

……これでいいのか？俺的にはいいんだが。そして一夏は捏造される運命にある、と。

「さてさて、専用機持ちの三人で写真撮つつかー！」

「…………」

「そんな嫌そうな顔しないでさー！」

もひるん嫌そうな顔をしたのは俺だ。めんどくさいつたりありやしない。写真なんかあつても無駄だ。

「セシリ亞ちゃんは織斑君と手を繋いで……そつそつ。それで久遠君は真ん中に座つて……うん、バツチリだよー。」

「……筆さんがすねといわ。怖いわ。……黒先生の命保証するこ  
とは出来ない。……」

「それじゃあ、撮るよー。35×51÷24は?」

「74・375」

「正解ー。」

パシャッとシャッター音がした後、周りを見ると案の定一組全員が周りにいた。

「クロックアップか……?」

「何だそれ?」

「いや、気にするな……」

この宴は10時まで続いた。べやつ……眠いや……

## 再会とパーティと寝不足（後書き）

タイトルの寝不足はパーティの次の日の事です。

## 苦労の上、不憫な主人公

「もうすぐクラス対抗戦だね！」

「そうだ、2組のクラス代表が変更になつたって知ってる？」

「なぜ俺の机の近くで話す。せめて俺から離れてくれ……寝不足で仕方ないんだ……」

「ああ……何とかって転校生に代わったのよね」

「転校生？ 今の時期に？」

「……」

「あきらか鈴だろ。昨日あつたし……ってあいつ一組か、残念だな……色々話したかったし……」

「うん、中国の代表候補生なんだって」

「ふん、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしり？」

「お前なんかどうでもいいだろ……」

「だつて弱いしな、と言おうとしたが、その前に首根っこをつかまれた。きやー、助けてー。」

「何ですって！？ わたくしが弱いなんて……ありえませんわー！」

「実際俺に負けてるしー。」

「あはは……けど、今のところ専用機を持つてるのって1組と4組だけだから余裕だよ」

「その情報古いよー。2組も専用機持ちがクラス代表になつたのー……」

つて、龍に何してんのよ……」

「ヘルプミー……」

ようやく登場か……遅いっての。「うお、セシリ亞を蹴り飛ばしたか。それで……俺の前に立つ。ありがたいけど……なんでしゃがんでるの？」

「助かった……ありがとよ、鈴」

「お前……鈴か？」

「別にいいわよ？ あんたは困つてるときこいつも助けてくれたし」

「ああ、そうだったつけ？」

「あれ、鈴さえも無視するのか！？ なあ、聞いてくれない！？」

……そんなこともあつたなあ……いや、正確に言えばあつたらしいんだが。このことはキバットに聞いたから、あんまり詳しく知らないんだよな。後で、映像探すか。

「それよりも……お前って専用機持つてるのか？」

「そうよ……その、助けてくれたお礼とかしなさこよ……」

「ああ、だからしゃがんでるのか。おまえは本当に頭撫でられるの好きだよな？」

「ん……べ、別にいいじゃない！」

「あのー……俺はー……」

「あ、ＳＨＲ始まるぞ。早く戻れ」

「あ、うん……」

寂しそうな表情を浮かべて教室を出て行つた鈴。つていうと、変な感じだから、1組の教室から出て行つた鈴。そして、鈴と入れ違いに織斑先生が入ってきて、ＳＨＲが始まった。はあ……また長い一日の始まりだ……

（～～～）

「まあ、昨日会つてゐるから……感動の再開つてわけでもないがな？」  
「わうね……まあ、いいわ！」

昼休み、俺は鈴と一緒に昼飯を食べていた。それにしても一夏がすねてるな。まあ、今まで無視され続けていたし、鈴にも無視されたから……な。

「それで……元氣にしてたか？」  
「もちろんよ！」  
「お、それなら良かつた。心配だつたからな？」  
「や、そう……ありがと……」

照れてるな……見たらすぐわかる。おつとせんなこと書かれてるとセシリアと篠がやつてきただぞ？

「龍」「そろそろどうこう関係が教えてほしいのだが」  
「そつですわ！龍」「さん、まさかこの方と付き合つてしまつしゃるのですか！？」

えつと。セシリアが聞いてくるのは分かる……と思つんだが、篠さんの理由が思い当たらぬ。何でだ？あいつが一夏を諦める事はないと思つんだが……

「べ、べべ……別に付き合つてゐる訳じや……」  
「まあ、わうだな……俺としては、こいつが恋人でも構わないんだが……」

おふやけが過ぎたかな？鈴が固まつてゐるし、セシリアは地団

駄踏んでる。筈は……どこからか知らないが木刀を構えている。

「…………え、それって……！」、告白なの…………？

「くうう……！わたくしはダメなのでしょうか…………！」

「…………お前つて奴は！」

「うう、ちょっと落ち着けって……！」

一 夏悟、登場。後はここに任せせるか。

「あ、そうだ。一 夏が言えって言つたんだな？」

「え？ は？」

「…………勘違いさせてえええ……！」

「許しませんわ……！」

「そうか、そうか…………そうであったか…………よし、一 夏。！」」

成敗してやる！」

「ちよつ……龍……待てええええ……！」

そして、ゆっくり歩いて帰るか。

## 苦勞のエノ不憫な主人公（後書き）

今回はいつもより短いです。

「お前のせいでえ……お前のせいでえ……」  
 「……眠いな……早く寮に帰るか」  
 「また無視するのか！？なあ、ちょっととくらに話を聞いてくれないのか！？」

放課後、一夏が抗議しこきたが……眠すぎてそれビリビリじゃない。といふわけで早く戻るか。面倒だし……もし着いてきたら、捕まえてやるだけだし……

（～）

「それで、案の定着いてきたといつわけか、龍一？」  
 「ああ、だからストーカーとして千冬さんの所へ連れて行こうと思つたんだが、どうする、篠？」  
 「勘違いだ！だからそれだけはやめてくれ！……」

……結局着いてきました。といつわけで、一夏の事が好きな篠さんが帰つてくるまで一夏を縛つて……帰つてきたんだが。

「よし、やうしょ！」  
 「おおい！？」  
 「いいのか、篠？」（）で一夏を助けたら少しばかりは好きになつてくれるかもよ？」  
 「別に構わん！さあ、行くぞ！」  
 「俺の味方は誰もいないのか！？」

……見捨てるりし。俺的には駄目だと言つても連れて行こうとした

たが……意外だつたな。さてと、足を掴んで、引きずりつて行くか……

「痛い痛い……」

「ふう……寮長室つてどこのへん？」

「たしかあつちだ」

「何してんのよ、龍？」

「ストーカーを鬼の生贋にするんだ。お前も行くか？」

「もちろんよ！」

鈴が仲間になつた……って言つてもだな、一夏はやっぱりたすけてもううとするんだな。

「鈴！助けてくれよ……！」

「それで？私はどうしたらいいわけ？」

「……いるだけでいい。おまえらに力仕事させられないからな」

「おい、龍！……そんな事言つならな！せめて縄だけでも解いてくれよ……なあ、無視か！？無視するんだよな！？」

「近所迷惑」

「ごふつ……！」

「さすが龍ね……！」

「む……」

ギヤーギヤーわめく変態に制裁を与えたらい、鈴が俺の腕に抱きついてきた。また、誘惑しようとして……頑張りだけは褒めてあげるよ。そして鶴！何故ムスッとする……？お前は一夏が……ん？

「疑問に思つ事がある……鶴？」

「な、何だ！？」

「お前つて……これが好きなんだろ？」

一夏を顎でさす俺。微笑む鈴。お前は恋敵がないと知つて喜んでるんだろ！？あれ、篠さん？何で固まってるのかな？それと顔赤くして…

「どうした、まさかとは思うが…」

「…多分、そのまさかだ…」

「…すなわち、私の敵ね！」

「鈴は黙つとけ」

「はう…」

まさか…」いつもそうだったのか…いや、つい最近なったのか。それにしても…めんどくさくなってきたな。確かに、最近それっぽい行動が多くつたが…

「まあ、その話は後であるとして…」

「あ、ああ…そうだな」

「…私も入れてくれ」「お前が入ると話がこんがらがるから黙れ」「むう…」

「…」「だな」

ようやく鬼の住処（寮長室）に着いたか。やつれと一夏を引き渡して帰るの…話がめんどくさい…

「織斑先生？ちょっと俺の事を追い掛け回す変態がいるので連れてきました~」

「ん？…ほんとうに」こいつがお前の事を？」

「はー、やつですかー…」

「やつが、なら後は任せや」

「あつがどういわこまーす」

よし、これで俺の仕事は終わつたな…いや、まだだつた。簞との話  
し合いがあつた。まあ、頑張つて一夏のことをもう一度好きにさせ  
ないとな!

「よし、帰るか…簞」

「や、そうだな…」

「えー? もしかしてあんたたち…同じ部屋なのー!?

「…そうです…」

「…くえ、いい事聞いたやつた じゃあ、またねー!..」

「嫌な予感しかしないんだが…」

「確かに…」

はあ…めんどくせえ。どつせ夜こいつそり来よつとでも思つてるんだ  
ううつな。まあ、それくらいならいいかな。そもそもあいつ、俺の部  
屋知らないから大丈夫ーさてと、ゆつくり話でもするか…

（）

「それで…おまえはどうしたいんだ?」

「私は…お前が好きだー」

「はあ…それが本心なのか?」

「え…そうだと言つてるだるー」

「一夏はどうなんだよ?」

…おひたくねえどじくれ。鎧でやくも堂々とそんなりと並わなこぞ  
？篇…嬉しへさじよ、一圓せじつするんだよ？

? 篠...嬉しいけど、一夏まだあるんだよ?

「ハーフモード」

「おいおい… お前はあいつの事が好きなんだろ？ そういう自分でも言

三  
七

「やつが  
あー

そこのかたは、あいのことを、紅馬鹿としか見てくれないのか？」

「ああ、もう！めんどくさいなあ！俺は早く寝たいの！俺の事好きだつてのは分かつた！だけどな、他にも俺の事を好きつて言ってくれる奴もいる！だから、お前も頑張れ！本当に、俺の事が好きならな！」

「……分が二だ。だが、さき、今田たけし、一緒は寝させてくれないか？」

卷之三

？？？  
もさか。

好きにし お前か たし通りに すれに し

？？本業のJIN書くと  
すこと待てたんだかな！」

田 覚 め の 算 ( 後 書 )

最近焦つて書くので元々悪い質が更に悪くなつてきています???

## 崩れ落ちるH／＼俺は元気

「ううーー…」  
「はあ、何でこいつなるかな…」  
「す、すまんな…」

篠が強引に俺のベットに入ってきた次の日、篠が咳をしていたので熱を測つたら…風邪を引いていたとさ。それで俺はこいつを一人にしておける訳が無いので、看病をするため今日は学校を休ませてもらつた。一夏は一緒にするといつたが、あいつは居ても居なくとも変わらないからな…必要ない。という訳で断つた。

「何でお前だけ風邪引いてるんだよ……俺は元気だぞ？」  
「私に聞かれても……」  
「ま、そうだよな……」  
俺はぱんぱんしてゐるのに、こいつだけ風邪を引いてる…………おかしくないか？夜中何かしてたんだろうな…………あ、それは違うな。俺、篠の事ずっと抱きしめてたからな。寝る前に、篠が抱きついてきたからな…………そのまま抱きしめた。その時から少し顔が赤かつたが…………あれは照れている表情だつたからな。

「ま、今はゆっくり寝る。腹減つてゐるならお粥作るけど？」

「…………作つてくれ」

「ん、じゅあちゅつと待つてろ…………『安静にしてろー』

本当にこいつは…………何故ついてこようとするのかな？…とつあえず、さつさと作りないとな…………えつと確かこっこ…………

／＼

「ほら、出来たぞ～」  
「す、すまないな……」

無事お粥を作った俺は、簞の所へ持つていぐ。簞はちゃんとベシードでじつとしていた。それは良かつたんだが……ちやんと食べれるかな？

「うーん……一人で食えるか？」  
「そつそれくらい出来るー！」  
「まあ、いいか……俺が食わせてやる……」  
「えー？あ、その……お願いします、」

病人に無駄な労働させないようになないと……な？とこうわけで、レンゲを使ってお粥を食わせることにした。

「はい、あーん……」  
「あ、あーん……う、皿いど？」  
「そつか？俺、味見してないから……どれどれ？」  
「なつ……ー」

簞さんは何に驚いているんだ……？……あ、間接キス？同じレンゲ使ったから？いやあ、初々しいな。

「ん？びついた？……あーん」  
「えー？あー……あーん……！」  
「ん、よしよし……」

「むっ……あまり頭を撫でるな……」

か、可憐い……涙田で俺を見つめるなああ……俺が、我慢出来なくなるから……

「…………はつーもつ、お腹一杯になつたか?」

「あ、ああ……ありがとひ。」

「よし、じやあ後はゆつくり寝ろ。睡眠が大切だからな

「ふあ……分かった、私は寝るとす」

「相変わらず寝るの早っ」

簾が寝ちやつたからやむことなくなつちまつた……暇だから、俺も寝よひ……簾と同じといひでな……あいつを、監視する意味で

「む……な……ねや……すみ……」

＼＼＼

「…………い……じ……せい……ひ……じ……おこ……」

龍一

「…………んあ?」

簾に起こされて外を見るとすつかり夕方になつていた。それと、俺の腕の中では簾が頬を膨らませていた……つて俺が起きるまではつとこの体勢だったのか……すまない事をしたな。

「やつと起きたのかー早く離してくれーー！」

「おっ、すまなかつたな」

「……そ、それでいいのだー！」

一瞬残念そうな表情浮かべたな?抱きしめていて欲しかったんだろ

うな……まあ、お詫びとしてだな、何かしてやらねばな。

「はこはこ、我慢な。一回も一緒に寝たんだからな」

「むう……それもそうだが……」

とりあえず頭撫でておいた。疲れるな。鈴よりも面倒なやつだな。まあ、いいんだけどな。それほどかわいいやつだ。無駄に疲れるけど……

「よし、飯でも食いに行くか！」

「ああ、分かった」

寮の食堂に行つたら、鈴に睨まれたり、殴られたり、俺が頭撫でて喜んだりと、色々あつたが……とりあえず一日が終わった。

／＼＼

「はあ、めんどくせ～…」

「まあ、頑張れよ！」

「お前なら出来るだろ？…」

「そうですね！このわたくしを倒せたのですから、余裕ですよよ！」

「まあ、そうだけどよ…篠さんとセシリ亞は厳しい…」

「…もういいや、どうせ俺なんか…」

それから数日たつて、クラス対抗戦の日がやってきた。ピットには俺と篠とセシリ亞と……一夏がいる。危なかった、本気で思い出せなかつた……覚えとかないとな。

『それで今日は何で行くんだ？』

『ん…あいつの事だから近接系だろ？だからな……オー

ズで行く！

『了解！』

あいつといつのは鈴の事だ。偶然かどうか知らないが、そういう組み合わせだった。

「さてと…………始めるか！」

『タカ！トラ！バッタ！ タ・ト・バ！タトバ タ・ト・バ！』

「頑張つてこい！」

「必ず勝つってきてください！」

「どうせ俺なんか…………

「ああ、行つてくる！」

面倒だよな、本当。どうせ原作通りだと無人TISが乱入するんだろう  
……まあ、なんとかなるか！！

崩れ落ちるH／俺は元気（後書き）

こんな駄作を見てくださいましてありがとうございます！

今日の俺は、阿修羅たり凌駕する存在だ！　～b Y龍～（前書き）

謝らなければならぬ点がいくつもありますが、まずは更新が遅れてしまい申し訳ありません。旅行などが続いてしまい、書く時間も少ないので、さらに宿題などもありましたので……って言い訳になりませんね。申し訳ありません。

それともう一点。何故かガンダム成分が入ってしまいました。作者は完全に壊れました。後々更にその片鱗を見せるでしょう。それが嫌な方はお帰りください。駄作ですが、これからもよろしくお願ひします。それと、最後に。10000コニーク突破しました。皆様のお陰です。本当にありがとうございます。ここで質問なのですが、突破記念と言うのはやつた方がよいのでしょうか？まだ早いなら、コメントで「指示お願いします。

今日の俺は、阿修羅むり凌駕する存在だ！ ～b Y龍～

「ようやく来たわね！」

「つたく…さつさと終わらせたいんだよ、面倒だからわ」

「あなたはいつもそうね…」

「分かってくれてありがとよ」

アリーナの中央に向かつて行くと、専用IS《甲龍》を展開させている鈴が俺の事を待ち構えていた。それよりも風邪気味なんだが…まさか、あれか？この前のせいいか？風邪を引いていた簞と寝ていたからなのか？そう考えていると、鈴が剣を構えたから俺もトラクロードを開いて相手がどう出るかを確認する。

「俺は負けてもどうでもいいんだが…俺はどつしたらい？」

「全力でかかつて来なさいよ！？」

「ですよね～…よし、始めるか

「もちろん…はあ…！」

そういうと鈴は、俺の方に向かつて剣を構えたまま飛んできて、俺に向かつて剣を降りかざしてきた。俺はトラクロードなんとか防ぐと、相手の腹に蹴りを入れる。女だろうが関係無い。全力で来いと言われたから全力を出すのみだ。まあ、可愛い女の子を蹴るのは俺としては気が引けるんだが…「うん、気にしないでおこつ。

「ぐつ！あんた…遠慮もくそもないのね…！」

「だつて全力なんだろ？これが全力。躊躇したら負けなんだ…うわっ！」

「じゃあ、私も躊躇しないわ…」

鈴は肩アーマーから衝撃砲を撃つてくる。不意をつくとは……恐ろしいやつだ。いや、確かに躊躇したら負けだとは言つたが。流石にここまで来ると怖いよな。嫌いになりそうだ

「はあ！？そ、それは嫌よ！？」

「あ、声に出てた？大丈夫だ、お前のことは好きだぞ？まだ、友達としてだが」

「まだつて事は…………！」

「ん？だつてこの学園で前から知つてるやつってお前だけだしな……会つた事もあるし」

なんか鈴さんが喜んで試合になつてないような……ちなみに鈴さんはその時腹いせに一夏を木刀で殴り、セシリ亞は…………うん、俺は何も見てない。まあ、ピットは恐ろしい事になつていたんだが、織斑先生が止めてくれたみたいだ。まあ、後が怖いんだがな。生きて寮に帰れるといいんだが…………あ、これつてフラグ？まあ、最悪クロックアップで抜け出すか。

「…………そろそろか？」

「ん？龍が告白するまで？」

「おーい。…………ほり、来るぞー！」

よつやく遮断シールドを突き破つてEVAが入つてきた。恐らく無人だろうが…………どうだろうな。、形がまだよく分からないから、判別がつかない。近寄りたくない。近づいて攻撃されるのは嫌だし、どうせ原作通りだと…………あ、どっちにしても面倒だ。

「なつ…………何よあれ！？」

「おい代表候補生、焦りすぎだろ。とりあえず、敵つて事は確かだろ「うわっ！…………」

「うわっ！…………すごいわね、あんなの撃つてくるあいつと、それを避

けるあんた……

おい。俺はあんな人外じやねえよ。大体お前も避けてるだろうが。まあ、一度転生してるから間違いではないかもしないが。ともかく、俺は人間だ！カテゴリ的にはだけどな、一応は人間だ、異論は認めない。絶対にISなんかじやないっての。というか、その俺をバカにしたような目は止める！

「つたぐ、面倒だし……後ろから援護頼むわ。俺は近接で攻めるから……なつー！」

「あれ弾き返すってどんなのよ……まあ、いいけど……」

……はあ、めんぢくわ。やつぱり一夏にやらせりやよかつたな……あ、無理か。あいつ空氣だし、鈴に無視されるな。全く、俺がこれ（無人ISの襲来）を知つてたから良かつたけどよ。

「キバット、どうすればいいと思つ？』

『そうだな……数で攻める（ガタキリバ）か、力攻め（ブトティラ・サゴーツ）か？』

「…………コンボを使わざるを得ないって事か？』

コンボ使つたあと疲れるから嫌なんだが、……そつは言つてられないしな。そういう考えると煙が晴れてきた……うん、何かツッコミたい所があるな。まず形状。まんま……某機動戦士の『スサノオ』なんですか？それをISサイズに縮めて……やべ、使いたい。どうしようかな……あれ、使いたいわ。マジで困る。潰さない程度にダメージ与えるか。けどな……うし、決めた。俺、あれ作る。ISコアは最悪束さんに作つてもらおう、無理だと思うが。そつなら作ればいい。うん、フラッグとかも作ろ。『グラム・スペヤル』もできるようになつないとな。よし、そつと決

まれば早い。速攻で潰す。

『 プテラ！ トリケラ！ テイラノ！ プツ トツ テイラノ・ザウルス』

「つと、こいつになるのは初めてだつたな」  
「映像見たけど……どうなつてゐるのかしらね？龍のIIS……」

Side 織斑一夏

くつそ………… 篓に叩かれた所が痛いぜ………… つてそれどこじゅじゅ  
ねえ！いきなりＩＳが入ってきたんだつた！

「鳳さん！久遠君！？聞いてますか！？もしもし…！」

駄目だこりや。個人間秘匿通信は声を出さなくともいいのにな、俺もつい最近知ったが。つまり、そこまで山田先生は焦つているようだ。まあ、俺は大丈夫だと思いますよ？ だって、龍二だし。

「ああ……あこひりがせてもこいだいが」「ああ、ああ、あこひりがせてもこいだいが」

か！？」

「まあ、落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからライライするんだ」

うん、俺もそう思つ。いや、千冬姉が心配してゐるかどうかで言

うと、心配してるだらうな。カップを持つ手が震えてるしな。ああ、  
塩を突っ込んだ。

「…………あの、先生。それ塩ですけど……」  
「…………」

「…………山田先生！？間違つてもそんな事を言ひひや黙日だ！」

「なぜ塩があるんだ」

「あ、ああ……？でもあの、大きく『塩』って……」  
「…………」

「あと、えと…………あ！久遠君の事が心配なんですねー彼の事が好く」  
「…………」

「ひいい！？」

「間違つてもそんな事は言ひてはいけないですよーあ、山田先生。」  
「コーヒーをどうぞ」

「え、でもそれって…………って、や、止めてください……」

「…………うん、俺は何も見てない。聞いてもいない。山田先生が血爆して塩たっぷりのコーヒーを一口飲み込まれてる間、俺はセシリアと幕のところに行つた。

「い、一夏さん！先生達はー！？」  
「えりとだな…………今あそこに行くのは恐ひしそうだ。止めとこ  
うぜー」  
「で、ですがーーわたくしは……」  
「…………つーー」  
「おこ、第一ーーどこ行くんだー！？」

幕がどこに行ってしまった……って追いかけないと……どうしたんだ？……こう言つときは俺の方向音痴を恨むぜ……

……ひちだ！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2188z/>

---

IS(インフィニット・ストラatos) ~何というチート人生~  
2012年1月10日22時45分発行